

居酒屋きさく

もうあたりはすっかり暗くなり、小高い丘の家々にはぼつぼつと明かりが灯りはじめている。空には満月と三日月が、両方浮かび上がっている。季節は秋だろうか。木の葉も伸びきった草花も赤や黄色に色づきはじめ、心地よい静謐な空気がただよっている。こうした夕刻の情景を背にしたこの居酒屋では、煙草をくわえて応対する主人を、カウンターに腰を落とした数人の客が取り囲み、それぞれの時間を楽しんでいる。屋外に仮設された建屋にも見えるが、柱時計やコンロなど内部空間を表すアイコンも描かれており、ここでは外部空間が室内に^{かんにゅう}嵌入した不思議なトポスが形成されていることが分かる。またカウンターの天板には、スケールの狂った小さな家や草木に取り囲まれて、小人たちの世界が展開している。画面右下、くつろいだ様子で煙草をくゆらせる客の手元に目をやると、ここにも小さなトロッコが円型のレールの上を旋回している。また隣のテーブルの上では複数の小人たちが語らっている。他の作品がそうであるように、どうやらここもまた、田中の想像力が生み出した幻想世界であるようだ。

ところが、この作品の舞台である「きさく」は、前橋にかつて実在した居酒屋である。2018年に惜しまれつつも閉店したが、絵画にも登場する「きさく」の文字の入った大きなちょうちんが目印のこじんまりとした感じのいい店であった。夜になるとこのちょ

うちんが暗闇に皓々と浮かび上がり、どこからともなく常連客がここに集まった。そのなかには映画監督の小栗康平、画家の茂木紘一をはじめ、詩人や俳人、舞踏家など各方面の芸術家たちの顔ぶれがあったという。田中自身もここに頻繁に通い、常連客の話に耳を傾けながら、腕のいい主人の出す酒や料理を楽しんだものだった。田中の特等席は、本作画面奥のカウンターの右側、L字に曲がった場所で、しめ鯖を好んで注文したと言う。凡庸と言え凡庸な、日常生活にぽっかり空いた、こうした緩やかな時間が、いまでは考えられないほど贅沢なものになってしまったものだ。



写真：米田雅夫